

能であった。血栓の存在判定については、RI-angioよりもCT、あるいは超音波検査が優っていた。

16. 腎機能検査法における¹²³I-ヒプランの使用経験

吉田 道夫 鷺海 良彦 一矢 有一
綾部 善治 桑原 康雄 和田 誠
林 隆元 松浦 啓一 (九大・放)

日本メジフィジクス社より新たに開発された¹²³I-ヒプランを用いて、腎動態イメージングおよびレノグラム検査を行った。対象は各種腎疾患23例で、そのうち15例は¹²³I-ヒプラン1mCiを使用し、シンチカメラにて腎動態イメージングおよび局所レノグラム検査を、残り8例は、¹²³I-ヒプラン20 μ Ciを使用し、レノグラム装置での検査を行った。その結果、腎の形態および機能上で有用な情報が得られた。被曝線量および γ 線エネルギーの点で、¹²³I-ヒプランは¹³¹I-ヒプランよりすぐれており、¹³¹I-ヒプランに代わるものとして臨床上有用な放射性薬剤と考えられた。

座長のまとめ(12~16)

中島 彰久 (大分医大・放)

演題12は、甲状腺癌骨転移例での骨シンチグラムが検討されたが、¹³¹I-の高い陽性率と共に適応について今後の検討を要する。

演題13は、乳癌術前に注入した^{99m}Tc-rheniumの周辺リンパ節描出が、転移例でも20~30%と高く、この核種の評価が難しい。

演題14は、体位や呼吸法を変えて^{81m}Krガスの肺内分布を検討し、この核種の長所を生かし、今後の有用性が期待される。

演題15は、心臓以外でのRI-angioと血液プールシンチの有用法を検討し、RI検査のみでも高い診断能(34/54)が得られ、今後、他検査との組合せや位置付けが重要となる。

演題16は、従来の¹³¹I-hippuranによるレノグラムに

比し、同時に良好なシンチグラムが得られる¹²³I-hippuranの有用法と、腎機能検査における貢献を予測させる。

17. 核医学の利用状況

中島 智能 (社)日本アイソトープ協会)

放射性医薬品

昭和55年度における放射性医薬品の使用金額は、250億に達し、うちin vivo使用が72億円、in vitro使用が178億円となっており、前年に比べて30%約の増加となっている。

(in vivo 使用)

主に17核種のRIが使用されているが、^{99m}Tcの使用が圧倒的に多く9割以上の施設で使用され、2700Ciとなっている。他には¹³³Xe、⁶⁷Ga、²⁰¹Tlが増大しているのに比べ、従来から使用されている¹³¹I、¹⁹⁸Au、⁷⁵Seは減少している。

(in vitro 使用)

テストチューブに換算して3,500万本が使用されており、過去数年代の伸びではないが、がん関連物質の使用比率が高まっている。

使用施設

核医学検査は、診療機関と一部の衛生検査所で使用されており、昭和56年9月現在の使用施設は1,218施設である。前年に比べて13施設の増となっている。

in vivo施設は48施設増えて853施設となっているのに対し、in vitro施設は48施設増えて853施設減って985施設となっている。これは新しく始める核医学施設が、in vitro検査を行わない施設が増えたことと、細々とin vitro検査だけを行っていた診療機関と衛生検査所の中で、外注に切り換えて使用を中止する傾向によるものである。

九州地方における使用施設は、156施設であり、in vivo施設は113、in vitro施設は109施設である。in vitro施設がin vivo施設より少なくなっており、他の地方と異った状況となっている。